

実践報告

「音声教科書」潜在的ニーズが高い現場での実践紹介 ～ライフステージを見据えた音声教科書の活用～

岐阜市立岐阜特別支援学校

教諭 神山 忠

現場には、読みに困難さを覚える児童生徒がかなりの割合存在する。ページをめくることが困難な児童生徒もいれば、文字を文字として認識するのに困難があったり、文字を音声化するのに困難があったりする児童生徒もいる。ここでは、後者のいわゆるディスレクシアの特性のある児童生徒の事例を紹介する。

児童 A の例 小学3年生の A 児は、通常学級に在籍しながら週に1回通級指導教室で指導を受けている。計算や工作などは得意なのだが、読みに関してはとても時間がかかったり、読み間違えが多かったりして印刷されたものでの学習に困難さが伴う児童である。

小学1年生の時には、母親が教科書を読み聞かせることで学校の授業に備えていた。

2年生になってから相談を受け、DAISY 教科書の存在を伝え利用に至った。もっぱら家庭で予習として使っていた。家庭で前の日に内容を読み上げさせ理解した上で授業に参加することで、授業中は通常の教科書を使つての学習に

取り組めた。しかし、国語以外でも教科書中心の学習が増えてきて家庭での予習に費やす時間に限界を感じるようになってきた。こうした状況もあり、2年生の10月から週に一度のLD/ADHD等通級指導教室での指導を受けるようになった。そこでは、ビジョントレーニングを中心に取り組み始めた。その一環として、黄色に反転した文節を目で追うことを主目的とした使い方での音声教科書の活用を行った。その中で、自分で目で追いやす文字の大きさ・書体・行間などの変更、そして音声の速さ・トーン・ポーズなどの調整を行った。これにより本来の力を発揮できるようになりつつある。

現在3年生だが、本人は授業中教室に持ち込んでの学習がしたいという思いと、自分だけ特別にパソコンを持ち込んで授業を受けるのは不安という思いで揺れていた。学校側も「特別扱いはできない」という姿勢から、それを活用することで「その子の学びが保証できるのなら」と認められることとなつていった。

生徒 B の例 中学3年生の B 生は、通常学級に在籍し小学校時代は DAISY 教科書を使っていた。しかし高学年になればなるほど、もっと手軽に、もっとかっこよく自分のスタイルで学習したいという思いを抱いてきた。

始めに行ったのは、ミュージックプレーヤーに音声だけ取り込み、傍からは音楽を聴いているように見せながら実は教科書を読ませて教科書を目で追うスタイルをとっていた。

深く理解したい場合、ミュージックプレーヤーでは、ピンポイントに読み直し・読み返すことが難しく次第にその使い方はしなくなった。

その代りにテキストデータを抜き出し、パソコンの読み上げソフトで対応するようになった。このころには、かなり速い音声読み上げでも理解できるようになっていたため DAISY で調整できる速さでは物足りなさを感じていた。また、肉声でなくても合成音声でも大丈夫になっていた。

教科書以外でも読みたい書物への対応を模索し始めた B 生は、OCR を活用して読み上げソフトで処理するスタイルをとっていった。

それ以降 DAISY 教科書を申請しなくなり、自分で必要な時に必要な部分を抜き出すようになった。しかし、受験の時

期になり、時間に追われるようになってから何か良い方法がないか新たな模索を始めだした。そして AccessReading の存在を知り申請をした。OCR を書けなくてもテキストが抜き出せる。自分の使い勝手の良い読み上げソフトにかけられる。非常に軽くさくさくと動作することが気に入り学習がはかどると本人は言っている。

また、e-Pub 形式の教科書をスマートフォンに入れて活用することも始めた。軽いので使い勝手がいいこと、一般的な電子書籍を読むリーダーで再生できることが気に入っている理由だ。

B 生は、音読は困難だが、字面から意味を汲み取り理解することは得意になってきた。また、早聞きの才能も開花させてきた。ただ課題としては、テストで回答するのに問題文を正確に把握して答えることには時間を要してしまう。別室受験での時間延長が合理的配慮なのか、問題文を音声提供することが合理的配慮なのか迷う部分である。本人は、筆記試験でなく面接で口頭試問の受験ができる高校を探している。

生徒 C の例 中学2年生の C 生はカンボジア国籍で父が日本の大学に留学しているために来日している生徒である。知的な遅れはないが、日本語での学習に困難さをかかえている。そのため自閉・

情緒学級で当該学年の学習内容を少人数で行っていた。

自分で読んで学習をすることは困難だが、支援者に呼んでももらえればおおむね理解することができた。そこで音声教科書を使っての学習を取り入れた。

家庭でも学校でもフルに音声教科書を使い学びを進めることができた。しかし、細かな理解という点では正確に行えていないことがかなりの頻度であった。

そこで、音声教科書からテキストを抜き出して、翻訳サイトを介して母国語に翻訳して確認する方法をとっていった。こうすることで、正しく理解できていたかの確認ができることはもとより、日本語の向上にもつながっていった。

彼も必要なのは、最低限テキストデータであったためDocxがとても有効であった。音声にも、母国語にも変換できる点。軽くて特別なプレイヤーが必要ではない点。それらの操作スキルは、他の学習や日常生活・余暇にも行かせ特別なことをしているという感覚がなく行える点がとても気に入っていると言っている。

多くの児童生徒と接してきて

読めないことを放置していると二次障害につながり自尊感情を失っていくことは共通して言える。(潜在的ニーズは、非常に高いが手が回っていない。)

情報保障という点で音声教科書を学びに生かせられると学習は進んで行く。

音声教科書を使っていけば読みの向上につながるかという点と困難さは残っている。また、訓練的な意味合いでの活用は本人を追い込むことになりえる。情報にアクセスできる。つまり学びの土俵に上がることを目的に使っていくと、共に学び合う状況づくりにつながる。(インクルーシブ教育)

慣れてくるとテクノロジー(ツール)を使い、文字を処理するスキルを身につけていくことが可能で、教科書以外の読み物にもチャレンジしていく児童生徒が比較的多い。(学びたい、知りたい意識は高い。)

手間がかからない(速い)、安価(安い)、正確さ(うまい)が一番だと思うが、当事者達は学年が上がるにつれて、「速い・安い・まずい」で十分だと感じるようになってくる。低学年では、正確さが欲しいが、中学生ぐらいになると合成音声にも慣れられるし読み間違えにも自分で気が付けて対処できる。

完全に作り上げられたものだけで学びを進めていくことよりも、テキストデータさえあれば苦手な文字に対応するための術(作戦)を習得できることも視野に入れた学びを進めることは重要なことだと感じている。